

Olive Picking Program 2013

～A program for Civil International Solidarity with Palestinians～

The Joint Advocacy Initiative of the East Jerusalem YMCA and YWCA of Palestine
& The Alternative Tourism Group

オリーブ収穫プログラム 2013

東エルサレム YMCA/パレスチナ YWCA(JAI)および
オルタナティブ・ツアー・グループ主催

参加報告書



2013年10月19日(土)～28日(月)
パレスチナ(ベツレヘム・エルサレム・ヘブロン他)

【プログラム概要】

このプログラムは、1948 年以降 60 年以上にわたるイスラエルの軍事占領下において、土地や資源を奪われ、400 万人を越える人々が難民となっているパレスチナの現状を、世界の人々に伝え、正義と平和の実現のために連帯することを目的として「オリーブの木キャンペーン」の一環として、毎年行われています。

【主催団体について】

- East Jerusalem YMCA ○YWCA of Palestine
- Joint Advocacy Initiative (JAI) ○Alternative Tourism Group (ATG)

東エルサレム YMCA とパレスチナ YWCA の共同により組織された Joint Advocacy Initiative と Alternative Tourism Group が今回のプログラムを企画主催しています。主に、プログラムのコーディネートを行い、現地での移動や宿泊などのコーディネートを ATG が行います。

【日程】

2013 年 10 月 19 日(土)～28 日(日) ※18 日深夜に現地到着、29 日朝帰国

【参加者・参加国】

15 カ国より 130 名(20 代～80 代まで幅広い世代)

オーストラリア、カナダ、デンマーク、フランス、ドイツ、アイルランド、日本、オランダ、ノルウェー、スウェーデン、スイス、イギリス、アメリカ、パレスチナ

※参加者は、全体で3つのグループに分けられ、グループごとに日中のスケジュール(行き先)でした。夜の自由参加のセッションなどや、最終日の振り返り・フェアウェルパーティなどは、合同で行われました。

【日本からの参加者】

梅澤昌子(大阪 YWCA 国際部ボランティア)
森小百合(日本 YMCA 同盟職員)



【スケジュール】

10月18日(金) ==>> 11時55分成田空港発のトルコ航空にて出国。イスタンブールでの乗り換えを経て、23時55分に、テルアビブ空港に到着。ATGが手配したバスに同乗し、ベイトサフルへ向かう。1時間ほどで、宿泊先であるサハラホテルに到着し就寝。

10月19日(土) ==>> ホテルでの朝食後、夕方のオリエンテーションまで自由行動。同じく早めにホテルに到着していた他の参加者とともに、ベツレヘム市街地での散策に、タクシーで向かう(10分程度)。散策と昼食後、近くのアイダキャンプ(難民キャンプ)を見学しホテルへ戻る。夕食後、3つのグループに分かれて、JAIスタッフよりプログラムに関するオリエンテーションを受ける。

私のグループは、参加者34名とJAIスタッフ3名。日によって、JAI主催の別プログラムでパレスチナに滞在中の10-20代の若者数名が合流することもあった。半数が50代以上であったが、20-30代の参加者も7名ほどおり、ほとんどが初参加のメンバー。友人から誘われた、教会で聞いたなど、参加動機も様々であった。

10月20日(日) ==>> 朝食後、バスに脚立、バケツ、シート、水などを詰め込み、8時に本日の収穫場所(Makhrouf)であるオリーブ畑に向けて出発。30分ほどで到着し、バスからすべての荷物を手分けして持ち、10分ほど歩いた先のパレスチナ人農家の家に到着。一休みしてからすぐに、オリーブ収穫作業を始める。12時半頃まで収穫作業を行い、昼食はオリーブ畑の持ち主である農家で、家庭料理をごちそうになった。谷間にあるオリーブ畑を見下ろすように、イスラエルのバイパス道路やチェックポイントがあり、建設中のアパートへイト壁が近くまで迫っている様子が見えた。

昼食後、農家の方々に感謝と別れを告げ、バスでベツレヘム近郊の難民キャンプ(アイダキャンプ)へ移動。ガイドやJAIスタッフの説明を聞きながら、アパートへイト壁のすぐ側にあるアイダキャンプを見学した。建物の屋上から壁の向こう側の様子や、壁に描かれたグラフィティ、イスラエルの



監視塔から打ち込まれる銃弾を防ぐために、窓ガラスがすべてコンクリートの壁になった学校の様子などを見る。「占領下ではどんな権利も守られない」という言葉の通り、壁によって分断された土地や、イスラエル兵からの銃による威嚇攻撃などで学校が休みになり十分な教育が受けられない子どもたちの日常を見聞きした。その後、ベツレヘムの町を散策してホテルへ戻った。

10月21日(月) ==>> この日は、1日エルサレムに滞在し、バスで移動しながら、エルサレム近郊

のベドウィン(遊牧民)を巡る問題や拡大する入植地についてのフィールドトリップ。生活のためのインフラも整わない環境で暮らさざるを得ないベドウィンの人たちへの、家屋や土地の破壊といった抑圧の現状を学ぶ。その後、東エルサレム YMCA にて昼食後、政治的歴史的視点から説明を受けながら、エルサレム旧市街地(ユダヤ教徒地区・キリスト教地区など)を散策した。オスマン帝国、ローマ帝国、イギリス、そしてイスラエルにと、植民地下に置かれ続けた「聖地」エルサレムの様子を、建築物や町の様子などから学んだ。大人数で人がひしめく狭い路地を移動するのは大変で、「他の観光団体のようにパレスチナの旗を目印に掲げられたらいいのだけど、ここではそれはできない」と冗談まじりに語ったガイドのエハブ氏の言葉に、パレスチナ自治区であるベツレヘムやベイトサフルと異なるエルサレムの政治的状況を実感させられた。エルサレムへの道中検問所を通ったが、「観光客を乗せたバス」として、特別なチェックなどはなかった。

10月22日(火) ==>>朝食後バスに乗って、オリーブの収穫場所(Makhrour)へ移動。前回と同じ地域の異なる農家の畑にて、お昼まで収穫作業を行う。参加者やパレスチナ農家の人たちと、それぞれの国の話や歌を歌いながらの作業。パレスチナの青年たちに、パレスチナの歌(My country, my home land という意味)を教えてもらい、2m以上あるオリーブの木に登り歌いながら収穫する。風と日差しが心地よく、とても平和な時間を過ごす。

農家宅での昼食後、パレスチナ難民のためのリソースセンター(BADIL)へ移動。ここでは、1948年のナクバ以来、いまなお続く難民たちの困難な状況や、他の国で難民として生活するパレスチナ人たちの現状に、情報発信や支援を行っている。”Ongoing NAKBA”(ナクバは今も続いている)という言葉に、過去の出来事ではなく、現在進行中の戦争なのだと深く考えさせられた。その後、難民キャンプの女性たちがオリーブ石けんを手作り販売している団体 Aseela を訪問した。石けんは、フランスや日本の NGO 団体を通じて、海外でも販売している。

10月23日(水) ==>>この日は一日自由行動で、参加者は死海やラマラへ観光に行ったり、ベツレヘムやベイトサフルでのんびりと過ごすなど、各々自由に過ごした。私と梅澤さんは、東エルサレム YMCA とパレスチナ YWCA を訪問するため、バスでエルサレムへ向かった。東エルサレム YMCA では、総主事のアンドレ氏やプログラムディレクターのミシェル氏より、館内施設を案内いただき、室内プールやジムルーム、ヨガやトレーニング用の部屋など、ウエルネスや子どもたち、女性たちに向けたプログラムの様子などを伺う。二人が来日された際の、日本や日本の YMCA での体験などを聞き、遠くはなれたパレスチナと日本との、確かな友情やつながりを改めて感じさせられた。

パレスチナ YWCA では、難民キャンプの女性たちの手作りの刺繍とオリーブの木で作った人形を、フェアトレードとして販売する新しいプロジェクトについて話を伺った。人形や刺繍とともに、作成し

た女性たちの置かれている状況やなぜ難民となったのかを、ひとりひとりの her story として伝えていくことも企画されている。その後、国連人権問題調整事務所(United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs)に訪問、さらにNPO 法人パレスチナ子どものキャンペーンでエルサレム在住の日本人スタッフである中村哲也氏と合流し、ガザなどでの活動の様子などお話を伺った。

行き帰りのバスでは、検問所でバスが止められ、イスラエル兵によるパスポートや身分証明書等のチェックが行われた。証明書を持っていないパレスチナ人の数名がバスを降ろされ、そのままバスは出発してしまった。検問所の横には地面に座らされた人が何人かおり、イスラエル兵のよる尋問を受けていた。普段「観光客」としてグループで行動しているときには、気づかなかった町や人々の様子を垣間見たようだった。

10月24日(木) ==>>朝食後、オリーブ畑(Wad Ahmad)に向けてバスで出発。検問所手前でバスを降り、脇道から山の谷間の道を20分~30分ほど歩いて、パレスチナ人農家のお宅に到着。家に向かう途中、何度も上空をイスラエル軍のものと思われるヘリコプターが往復し、移動する私たちを監視していた。昼食まで、畑でオリーブ収穫を行う。土地や畑によってオリーブの種類も実り方も少しずつ異なっていた。昼食後には、オリーブ畑の持ち主であるエイメン氏のお母さん手作りの刺繍品を披露してもらい、それぞれクッションカバーやストールなどを購入した。帰りは、別の道を通り、また20~30分ほど歩いてフェンスを越え、迎いのバスの待っている場所へ移動する。

午後は、イスラエル占領下のパレスチナが地理的にどのような状況にあり、土地略奪の経緯などについてリサーチし情報発信しているARIJを訪問。政治的戦略的に、土地が刻一刻と奪われていく様子を地図や統計から学び、そのひとつひとつに生身の人間のいのちや人生があり、今朝出会った農家の人たちもその一人なのだと考えると、土地を巡る問題はいのちを巡る問題なのだと痛感させられた。その後、収穫したオリーブをオリーブオイルに加工する工場を見学し、ホテルへ帰った。

10月25日(金) ==>>この日は終日オリーブ畑(Etzion/Abda)で収穫作業を行った。特に、畑のすぐ隣まで入植地がきており、入植者たちからの嫌がらせや攻撃にたびたび衝突も多い土地。参加者の中には、作業中に何か嫌がらせをされるのではないかと心配するものもいたが、作業は一日無事に行うことができた。昼食の際、食事の準備をする農家の女性たちと、アラビア語と日本語と英語で語り合う時間を過ごした。言葉や国を越えて共に笑い合えたことがとても



嬉しく感じた。どの世界でも女性が笑っていられるところには、エネルギーや希望があるのだ。農家の子どもエクハルと共にオリーブを収穫しながら話す中で「I am from Palestine. I love Palestine」と言われた言葉が脳裏に焼き付いた。誇りに思い大事にしている国や土地が、日々奪われている現状を、10代の彼女の目はどう見ているのだろうかと思わずにはいられなかった。

一日中畑で過ごしたこともあり、大きな達成感と充実感に満ちてホテルへ帰った。しかし安易な達成感や充実感は、物事の本質を見誤るのではないかと不安になり、私はひとりなぜか気分が晴れなかった。

10月26日(土) ==>>朝食後、バスでヘブロンへ向かった。ガラス・陶器工場を見学した後、にぎやかな市場通りを抜けて、旧市街地へ到着。パレスチナ当局が管理する H1 地区から、イスラエル当局が支配下に置く H2 地区へと歩いて移動する。イスラエル軍により強制的に道が封鎖され、各所に検問所があり、移動の制限や嫌がらせなどが日常的に行われている。ヘブロンは、ユダヤ人地区とパレスチナ人地区が隣接している地域であるため、イスラエル軍によるセキュリティも厳しく、民族間宗教観の衝突も多い。住民への脅しや暴力によって店を開けられなくなった通りや、入植者の建物から捨てられるゴミを避けるために、フェンスやシートなどで覆われ薄暗くなった通りを歩いた。ガイドの話では、ユダヤ人の学校では、人種差別的視点(アラブ人は危険だなど)による教育が行われ、土地取得の正当性やアラブ人に対する偏見などが子どもたちに大きな影響を与えている。ユダヤ教の祭りの影響で、イブラヒムモスクやヘブロン・リハビリテーションセンターへの訪問は叶わなかったが、ヘブロン市街地に住むパレスチナ人家族の家で昼食をいただき、占領下にある都市で生きる人たちの話を聞くことができた。

市街地を歩く際、銃を持ったイスラエル兵が各所におり、自宅のすぐ側で戦車や銃を持った兵士が行き来するのを見た。バスが待つ場所まで移動する際、来た道に戻ることをイスラエル兵に許されず、地元のパレスチナ人たちが使っている道を迂回することになった。パレスチナ人を支援する者として、嫌がらせを受け、パレスチナ人たちが日々受けている扱いを体験して、「植民地下/占領地下」で生きる現実を改めて考えさせられた。

10月27日(日) ==>>この日は最後のオリーブ収穫の日であり、バスで収穫場所(Walaja)へ向かった。しかし現地でバスを降りて畑に向かう途中、イスラエル兵により足止めを食らうこととなった。「隣接する入植地の住民との衝突を避けるため」という理由で、世界各地から参加者のある私たちグループが、オリーブ畑に入ることを阻止しようとしていた。いつの間にか、銃を持ったイスラエル兵15名ほどに囲まれ、畑への道を阻まれたまま、畑の持ち主であるパレスチナ人や、JAIスタッフがイスラエル兵と交渉し、2時間後、結局畑まで4-5mのところまで来て作業を断念せざるを得なくなった。待っている間、騒動に気づいて集まって来た近隣の子どもたちの中にいた、21歳のシュヘー



ルという女性と話をした。彼女の家は数ヶ月前に、近くの入植者たちの攻撃によって破壊され、今はテントで生活しているという。見ると、壊滅したコンクリートの壁がむき出しのまま放置されていた。シュヘールの家族や仕事や夢について話を聞いているうちに、ここでの収穫作業を断念することが JAI スタッフから告げられた。悔しさと苦々しい気持ちのままシュヘールに別れを告げ、バスで別の畑へ移動した。

以前に教えてもらったパレスチナの歌「マウンティニー」をみんなで歌いながら、自分の土地で自由に行き来できない悔しさや、理不尽な仕打ちに決して負けたくないという思いを痛感した。移動した別の畑で、昼過ぎまで収穫作業を続け、昼食後ホテルに戻り、JAI による振り返りと政策提言のセッションに参加した。

JAI のスタッフから「旅の終わりは、次の長い旅の始まり」と語られ、このプログラムで私たちが何に出会い、何をを行い、これから何をするのかを一人一人に問いかけるセッションであった。参加者の数名が、自分の体験や感想をシェアするのを聞きながら、「私自身が次の希望へつながる」ために何をすべきかを考えさせられた。その夜はフェアウェルパーティでパレスチナ伝統の踊りやオリエンタル音楽を楽しむひと時を、参加者とともに過ごし、長いようで短かったプログラムが終了した。

10月28日(月) ==>>早朝ホテルを出発し、タクシーで1時間ほどかけテルアビブ空港へ向かった。出発3時間前に空港に到着すると、チェックインの列で脇に呼び出され、女性の空港職員からしつこい質問を浴びせられた。なぜイスラエルに来たのか、なぜ一人で来たのか、旅行の計画はいつ頃決め、チケットを手配したのはいつ頃か、日本での仕事は何かなど、20~30分ほど質問を受け、ようやく搭乗手続きができた。その後も荷物検査として、荷物をすべて開けられ、機械を使ったチェックなど、何度も同じ質問を繰り返されながらも、なんとかゲートまで到着し、無事に出国することができた。

10月29日(火) ==>>イスタンブールで乗り換え、成田空港に到着。

【オプションの夜プログラムについて】

プログラム期間中、毎晩 19 時半からオプションプログラムとして、フィルムや写真の上映や講演などが行われました。参加者は各々関心のあるプログラムに参加し、パレスチナを巡るさまざまな課題について学びました。

○フィルム“Roadmap to Apartheid”の上映

南アフリカでのアパルトヘイト政策と、パレスチナ/イスラエルを巡る課題を考える。

○カイロス・パレスチナ文書について

南アフリカの教会が1980年代半ばに発表したカイロス文書(アパルトヘイトを終わらせるために教会や市民へ呼びかけた文書)と関連づけ、パレスチナキリスト者が公表した声明を学ぶ。

○パレスチナの写真展

アメリカ人写真家の Rayan Rodrick Beiler 氏によるパレスチナの写真の紹介とトーク。

○イスラエル支援企業へのボイコットキャンペーン

2005 年から始まった市民によるボイコットキャンペーン(BDS)の紹介。

○パレスチナとイスラエルを巡る問題～人権運動の視点から～

パレスチナの大学で教鞭をとる Mazin Qumsiyeh 氏より、パレスチナにおける抵抗の歴史や近年の問題について、「人権」の視点からの講演。

○イスラエル兵によるパレスチナ人子どもの人権を巡る問題

人権活動家である Rifat Kassis 氏により、パレスチナ人の子どもたちが直面しているイスラエル兵による投獄やハラスメントに関する現状と、子どもたちの権利を守る支援を行う団体の働きに聞く。

【ホテル滞在の様子】

参加者は滞在先として、ホテルか現地ホストファミリー宅でのホームステイのどちらかを選択できました。プログラム全体で参加者が 130 名ほどであったので、参加者は3つのホテル組(サハラホテル、ゴールデンパークホテル、アララトホテル)とホームステイ組に分けられました。私はホテルを選び、期間中はサハラホテルに滞



在しました。他の2つのホテルに比べて小さいホテルでしたが、私の参加したグループのメンバーはほとんどがサハラホテルに滞在していたので、朝食や夕食の際には一日を振り返っての感想・情報共有や、各国のことやそれぞれの背景などについてじっくりと話すことができました。

「ひとりひとりに、それぞれの物語があるのね」と語ったイギリス人ジェニーの言葉通り、十人十色の動機や目的があることを、食事のときや朝晩の自由な時間での会話の中で知ることができました。また英語で進められるプログラムでは、聞き逃してしまう部分も多々あり、グループのメンバーに後で教えてもらったり、それをきっかけにして、今日見聞きしたことについて、互いに感じたこと考えたことを分かち合うことができました。日常生活の中でどれだけ社会的課題や平和や正義について考えているだろうか、家族や友人など大切な人とどうこの体験を分かち合うことができるだろうか語り合うとき、自分の考えを整理したり新しい課題を発見したりすることもありました。帰国後もゆるやかに関係が続いているのは、ホテル滞在での共に過ごした時間のおかげだと思います。

【全体感想】

「旅の終わりは、次の長い旅の始まり」

日本を出発する朝、成田空港へ向かう電車の中でふと「三里塚闘争」のことを思い出しました。国の一方的な決定と「国策」という暴力により、自分たちの住む場所や農地を奪われた1960年代の日本に生きた人たちと、国家間の取り決めにより、土地や権利を奪われ続けている現在のパレスチナの人たちが、私の頭の中で重なりました。私がこれから出会う人たちは、どんな風だろうか、私はすべてを吸収して理解することができるだろうか、私には何が出来るだろうか、緊張と不安の中飛行機へ乗り込みました。

初めて訪れたパレスチナでは、言葉で語り尽くせない多くの出会いと発見がありました。ハーブたっぷりのレモネードにチーズや野菜やフムスを挟んだピタパン、人懐っこいタクシーの運転手や商店の人たち、欧米やアジアから大型バスで集まる大人数の観光客、教会の鐘とモスクから聞こえるコーランのコラボレーション、ひとつひとつがとても新鮮でした。また、聖書に登場する人や地名を見聞きすると、幼いころから教会や家で聞かされた「聖書の世界」に入り込んだようで、わくわくした気持ちにもなりました。

一方で、パレスチナで出会う「初めて」は、いいことばかりではありませんでした。空港での威圧的でしつこい質問とチェック、無数にある検問所や銃を肩にかけて仁王立ちするイスラエル兵士、高くそびえ立つアパルトヘイト壁、破壊された家々、壁に描かれた解放と平和を求めるグラフィティ、パレスチナ人に向けられる乱暴な声。日本では目にしないものや出来事に遭遇することが多々ありました。「軍事的占領下」にある生活を目の当たりにしたのは、これが初めての経験でした。6日目に訪れたオリーブ畑の持ち主エイメンは、とてもユニークなパレスチナ人で、いつもニコニコしてジョークで私たちを笑わせてくれました。そんな彼でもイスラエルやパレスチナをめぐる問題について質問されると、急に表情から笑顔が消え「ここで聞いたこと、見たことは外では話さないでほしい。イスラエル兵に知られると面倒だから」と静かに重く語りました。深い谷間にあるエイメンの土地と家に行くためには、イスラエル軍の検問所のわきを抜けるか、勝手に設置されたフェンスを潜り抜けるしかありません。オリーブ畑の暖かい日差しの下で穏やかな作業の時間を過ごした後、冷たいフェンスを潜り抜けて町へ戻るときに、“Welcome to the reality”とエイメンに声をかけられました。行きたい場所へ自由に移動でき、穏やかな時間の流れるオリーブ畑ではなく、どこに行くにもIDや証明の提示が求められ、銃を持った兵士に不当な扱いをされ、誤った歴史観や価値観を持ったユダヤ人たちに敵視される世界こそが、私たちの「現実」の社会なのだとされているようでした。

私にとって「現実」とは何だろうかと問われ、「初めて」だと思っていた数々の風景が、実は私の生活の身近なところによくあるものなのだと気づかされました。民族の違いを理由に差別され、誤った歴史観や民族差別によりヘイトスピーチが投げつけられる大久保や鶴橋の在日韓国・朝鮮人の人々、米軍基地の移設・建設により自分の土地や豊かな自然をめぐって長年抵抗し続ける沖縄・辺野古や高江の人々、「安全保障」や「平和」を目的に、より危険な兵器やオスプレイを押し付けら

れる岩国や普天間の住民たち、福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染のゆえに、十分な補償も得られないまま住む場所を追われた福島の人たち。問題の背景や規模や時間的長さは違っても、人々のいのちが抑圧され傷つけられる構造は、どれも共通しているようでした。

その気づきは私に、学生YMCAを通じて参加したWSCF(世界学生キリスト教連盟)のプログラム(インド)最後のセッションで、“Every issues are linked in this world”と学んだことを思い起させました。世界中で起こっている様々な問題・課題は、それぞれが独立無関係なものではなく、実はすべてが関係し合っていること、私たち自身もそこにつながっているのだということ、この世界は私たちが少しずつ創りあげているのだということ、だからこそ私たち自身の身近な変化や選択によって、それが世界の変化へと連動するのだということ。インドでの多国籍企業による経済発展の裏側や貧富格差の問題を学び、私は自分の小さな変化が世界の変化につながることを信じて、不買運動(コカコーラ社、マクドナルド社、ケンタッキー・フライド・チキン社などの商品を買わないようにすることで、その企業の問題性を考え、議論する機会をつくること)を続けてきました。ただ問題や現状を伝えるだけではなく、具体的に自分自身の生き方や生活を変えることから始めようと思ってから8年以上が経ち、今回のパレスチナでの体験がその意義を確認させてくれたように思います。

「私たちにとってオリーブは希望の象徴です。あなたたちは、その希望が生き続けていることを、世界の人々に伝えてください。」これは、プログラム中に何度も聞いた言葉です。私には、あの場所で出会ったパレスチナの人たちひとりひとりが、この世界の希望なのだと思います。人と人・人と土地が引き裂かれる暴力に抗いながら生きるには、パレスチナ人たちだけでは難しい。だからこそ、世界各地の仲間たちが集まって、国際的な視点やそれぞれの経験から、パレスチナ人たちに連帯し、共に働く必要があるのです。私一人では、60年以上続くパレスチナをめぐる問題を解決することはできないかもしれません。けれど、このプログラムで出会った各国の友人たちと過ごしたかけがえのない時間が、ひとりの小さな力や変化が、社会や世界の大きな変化につながるのだと確信させてくれました。1人でも多くの人が、パレスチナに行き続ける希望に連帯し、思いと行動を繋ぎ合っていくことができる。これもまた、私たちの「現実」なのではないでしょうか。



旅の終わりは、次の長い旅の始まりです。私の新しい次の旅はもうすでに始まっているのです。パレスチナで力強く語られたこの言葉の通り、私は自分の生き方を変えながら、他のだれかの生き方を変えることを呼びかけていきたいと思っています。小さな希望に連帯し、私自身がこの大きな世界を変化へとつなげるために、これからもYMCAでの働きに努めていきたいと思っています。

プログラムへの参加にあたり、多くの方々のお支えとお祈りに、心から感謝いたします。